人が犠牲になった。(毎年法要を開催)

じゅうたん爆撃は日本焦土化作戦

B29は「超空の要塞」と言われ航続距離5230キロ、米軍のマリアナ諸島占領(44年夏)により日本本土への往復が可能となり空襲が激化していく。

投下する焼夷弾は日本家屋が火に弱いことに目をつけ広範囲に火災を発生させるように開発された。850度の高熱、粘着性があり付着したらとれにくく、束ねられた38個がバラバラになって落ちてくる。街を焼き尽くし、人々を無差別に焼き殺す非人道的な兵器。

床に敷かれたじゅうたんのように爆弾が一面を覆う「じゅうたん爆撃」を最初に実践し、日本焦土化作戦を立案・指揮したのが、1945年1月爆撃機司令官に着任したカーチス・ルメイ少将。国際法で禁じられているがお構いなし。

日本は戦後、なんとこの男に航空自衛隊の生みの親として勲章を授与している！あきれ果てた国だ。

ここで知っておかなければならないことは、日本も中国で10年以上にわたり民間人を無差別に虐殺する都市市街地への無差別爆撃を行ってきた事実。

政府のウソと無策で被害が拡大

政府は真珠湾攻撃の2日後には、「時局防空必携」という一般市民向け手引書を発行し、防空訓練を命じた。

ここには「空襲は必ず受ける」とした上で、弾はめったに当たらない、死傷する者は極めて少ない、焼夷弾も心がけと準備次第で消しとめられる等と書かれ「火たたきで叩き落とす、砂や土をかぶせ水をかける」と防火方法を教えている。とんでもない甘い想定でマンガ的「訓練」をやらせていたのだ。

さらに1937年制定、41年改悪の「防空法」は、刑事罰をもって子ども・高齢者・病人を除いて空襲からの避難を禁じ、消火活動を義務付けていた。

「戦災孤児」とされた裁判原告の谷口さん、女手ひとつで育ててくれた母の最後の言葉は「今夜の空襲は大きいわ。お母ちゃんは家を守らなあかんからお姉ちゃんと二人でお逃げ」。その夜母は長兄と防空壕で窒息死。家を守る一この言葉の意味を谷口さんが理解したのは65年後のこと。「戦争とはいえ、親を亡くした子どもほどみじめなものはありません。ただただ耐えるだけでした。母も一緒に逃げていたら、と思わなかった日はありません…」

ドレスデン空襲

最後はドイツ東部のドレスデンの話。米英軍の無差別爆撃で8割が廃墟に死者2万5千人以上。国は被害者に賠償すると同時に「ドイツによる戦争の犠牲者を忘れることはできない」という姿勢で戦争の歴史と向き合っている。

～子や孫にも聞いて欲しい話でした～

7/28 大空襲の体験を語る集い 空からの虐殺—大阪とドレスデン

7月28日「NPOみなと」が主催する恒例の「大空襲の体験を語る集い」が田中機械ホールで開かれました。

会場には原爆、戦争、原発にかかわる貴重な資料や書物、遺品、空襲体験者の絵などが展示され、集会では代表理事らの挨拶の後、講演と空襲被害者・伊賀孝子さんの発言がありました。

反戦・反差別を貫いて

今年の講演者は「新聞うずみ火」の矢野宏さん、演題は「空からの虐殺—大阪とドレスデン」でした。

米軍による空襲が残虐な日本焦土化作戦であったこと、大阪大空襲の実相、日本政府の無策が被害を拡大したこと、国は責任をとっていないことなどが、被害者の証言を交えて話されました。

講演の始めに「新聞うずみ火」の紹

介がありました。うずみ火とは灰の中に埋めた炭火のこと。矢野さんはその名にふさわしいジャーナリストとして反戦・反差別を貫く仕事を重ね、空襲体験者の「記憶」を「記録」にし、大阪空襲訴訟（※）を支える会代表もされています。講演を簡単に紹介します。

空襲で大阪の人口は半減

大空襲とはB29爆撃機が百機以上来襲した空襲のことで大阪大空襲は計8回。ちなみに空襲は44年12月から敗戦まで50回を超え大阪の人口は半減している。

（全国の死傷者は102万人半数が死者）

第一次大空襲は3月13日深夜から3時間半、一夜にして4千人が死亡。

最後は敗戦前日、狙いは巨大軍事施設「大阪砲兵工廠」だったが、近くの京橋駅を1トン焼夷弾が直撃、多くの

※大阪空襲訴訟～「国民は等しく耐えろ」やって！

この裁判は、太平洋戦争開戦から67年もたった2008年12月、23人の方が原告となり、「国の責任をはっきりさせて、二度と戦争の悲劇をくり返さない」強い意志を込めて開始した。国は旧

軍人・軍属とその遺族には総額五十兆円もの恩給や年金を支給してきたが民間の空襲被害者に対しては、戦争中に制定された「戦時災害保護法」を46年廃止して放置。「戦争という非常事態のもとでは、国民は等しく耐えなければならない」という「戦争損害受忍論」を

振りかざして責任回避してきた。裁判所は国の主張をそのまま認め、原告の訴えを退けたが、原告の皆さんの被害事実、国に突きつけた訴えは決して「無かったこと」にはできない。今回の講演でも、戦後も続く一人一人の被害の深刻さ、国の責任の重さを痛感した。

組織を強化拡大し、階級的労働運動の発展をめざそう！